

NVC Monthly



同好会ニュース

寝屋川映像同好会会報

第11号(20100416)

発行 竹田幸男



高井邸で 宴のあと



難波邸での「ひなまつり前夜祭」



宿泊施設・交流館で



五輪坊前

大原撮影会実施（前ページ写真）

4月2日・3日の大原撮影会は、会員8名、映像協会会員1名、他1名の計10人が参加、田淵会員は準備のため車で前日に先発。当日は京阪・JR・智頭急行を乗り継いで昼過ぎに到着、昼食後、高井邸でひな飾り準備状況を撮影、ついで因幡街道智頭宿へ移動して撮影、夜は大原宿の難波邸で地元の古町を愛する会の人々の「ひなまつり前夜祭」に参加し、大歓迎を受けながら多くの人と語り合うことができました。

翌日は古町のひな祭りの撮影、スタンプラリーをしながらの撮影は途中でスタンプ台紙を紛失して地元の人々の協力を得ながら再取得する人もあり、列車時刻までたっぷり撮影に励みました。高井様・平尾様始め現地の多くの方々のおかげで充実した撮影会となりました。

4月例会の開催

4月例会は例月より1週遅れの4月16日（金）詳細は「例会の窓」参照。

例会の窓

平成22年4月例会

日 時 平成22年4月16日（金）

13:30～17:00

場 所 寝屋川市民活動センター

（市民会館4F）子供部屋

出席者 天野 新井 石田 小笠原 梶本 竹田 谷 田淵（8名）

欠席者 竹下 竹嶋（50音別 敬称略）

例会次第（今回の要約 小笠原氏）

1. 会員の近況

竹下さんが快方に向かっておられると、竹田会長から報告があった。次回例会にご参加いただけることを楽しみに。

2. 報告・連絡・協議事項

第4回映像発表会（3/20）について

- ・評判が良く盛会であった。
- ・参加頂いた人数は会場との関係で丁度良かった。
- ・参加頂いた方へのお礼状は、招待者が当日対応していることでもあり出さない。
- ・松愛会ホームページ用の写真を作成・送付 担当 田淵

岡山・大原宿 古町ひなまつり撮影旅行について（4月2～3日）

- ・田淵さんから収支報告をしていただいた。
- ・残金 12,380円（参加者10名 内会員8名、会員以外2名）
- ・返金 会員以外の2名の方に 2,000円返金する（1,000円/人）
- ・残金 10,380円は、会費に入金処理とする。
- ・竹田会長から古町の方数人に礼状送付済み。
- ・静止画をSDカードに入れて、高井様にお渡しする。

- ・ひなまつりに参加された方の「全景・表札」をほぼ網羅したものを。
- ・「古町を愛する会」主催の「ひなまつり前夜祭」の様子を記録としてDVDにまとめお渡しする。(会員の映像作品は後日お渡しする) 担当 小笠原

傷害保険(スポーツ安全保険)加入について

- ・団体保険で当会が加入し、加入希望メンバーが被保険者となる。5人以上加入必要
- ・年間保険料 600円/人、当会の活動中の事故が補償対象。傷害死亡2,000万円、入院日額4,000、通院1,500円。活動中の突然死180万円があるのが特徴。
- ・詳細は約款で確認
- ・加入希望者 天野 新井 小笠原 梶本 竹田(当日出席者の加入希望者)
- ・欠席者の加入希望の確認を取る(担当 竹田)
- 石田さん 仮メールアドレス取得 メールでのやり取りが可能になった。

他団体との関連事項

- ・寝屋川映像協会撮影会
 - ・6月9日 山田池にて 詳細は5月例会で報告する。

パソコン操作に関して

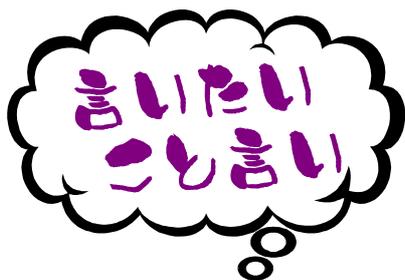
- ・VistaからWindows7にしたところ、エクセルが使えなくなった。
- ・エクセルのソフトを再インストールすれば使えるのではないか。
- ・デスクトップのゴミ箱を誤って削除し、復帰に困ったが、インターネットで「ゴミ箱削除」で検索したところ、復帰方法が見つかった。処理方法が判らない時はこの方法を活用できるのではないか。
- ・間違って処理した時は、「CTRL+Z」で処理前に戻すことができる。

3. 作品映写

- 「山田池の自然」: 6分 谷さん
 - ・長い期間をかけて撮った作品で根気強さを感じる。良くまとまっている。
- 「パッチャーコーフェル」: 6分 谷さん
 - ・BGMはモーツァルトピアノ協奏曲21番だった。20番の方が暖かくて相応しいのではないか。
- 「古町ひなまつり前夜祭」: 35分 小笠原さん 作品ではなく記録DVD。
 - ・BGMの2か所、フェードイン・アウトした方が良い。
 - ・「籠」は間違い。「駕籠」が正しい。
- 「宮本武蔵生誕の里を訪ねて」: 8分 小笠原さん
 - ・なかなか帰ってこないと思ったら、地元の人のお話を撮っていたのですね。

4. 次回例会

- ・5月14日(金) 13:30 ~ 於: 市民活動センター こども部屋
- ・カメラ担当: 小笠原さん



撮 影 禁 止 !

竹 田 幸 男

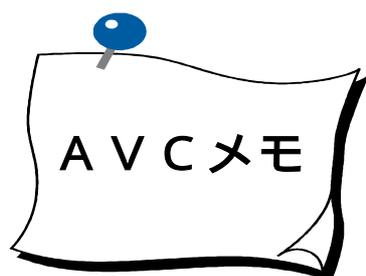
皆さん、美術館や博物館は「撮影禁止」の場だと思いませんか。神社でも熊野本宮大社の門をくぐったところで「撮影禁止」の札。以前京都の醍醐寺の庭園で撮そうとしたと

ころ「撮影してはいけません！」の怒声が。仏像などは信仰の対象なので撮さないでほしいという気持ちは理解できますが、テレビ局ならなぜいいのか、という疑問はめぐえません。撮影料が入ればいいが、タダで撮されるのは腹立つ！というのか？

ウィーンの美術史美術館でクリムトの「接吻」などを撮していたところ、観光客らしい日本人のご婦人がツカツカとやってきて、「こんなところで撮してはいけません」といいます。「入口の係はOKといたしましたよ」といっても「嘘つけ！」という目をしながら彼女は去っていきましたが。

ヨーロッパなどは原則OKなのです。ルーブル美術館でもウフィツイ美術館でも大英博物館でも、とがめられることはありません。フラッシュとかライトはNGですが、これは美術品を（少しでも）損傷するとか、鑑賞の妨げになるということで、この禁制は合理的です。だから私の映像作品「ほんものに逢えるよろこび」も出来ました。実はマウリッツハウス美術館では警告を受けまして、なにかというと、オランダ語はわかりませんでした。かぶっていたキャップのひさしをうしろに回しなさい、といわれたのです。キャップの庇が絵に触らないか、と危惧されたほど、私はほんものの「真珠の耳飾りの少女」に近づいてうっとりとして絵を見ていたのです。

こんな「ほんもの」が日本へ来たらどうでしょうか。撮影はおろか、厚いガラスに隔てられて「早く進んでください」と後押しされてろくに見ることもかなわない有様です。ヨーロッパでは美術品や宝物は人類共通の宝である、だからみんなに広く見てもらいたい、という気持ちがあるのでしょうか。ルーブルではイーゼルを立てかけて、長い物差しで絵を測りながら（絵には触りませんが）模写をしている画家が何人もいました。日本では考えられない光景です。日本では「金で買った物だから、金を掛けて作った物だから、タダで撮されてはかなわない」という気持ちがあるのかと勘ぐってしまいます。子供の頃、大人たちが「写真を撮ると影が薄くなる」といって写真を撮っていたのを思い出します。タダで撮すと影が薄くなって、金を払って撮すと影が濃くなるのか、なにか呪術的な思いが日本人にはあるのか、これはなかなか興味がある文化人類学的なテーマだと思います。（寝屋川市映像協会会報「ししおどし41号 22年4月25日「思いのままに」より転載）



ナレーションの録音レベル

竹田幸男

ナレーターにお願いしてテープに入れてもらった録音を使って作品を作ったところ、音が歪んでいた、という現象が最近例会で発生しています。

ナレーションのレベルが現地音のレベルに負けてしまって内容がよく聞き取れない、ということがよくあります。このため、ナレーションのレベルを高くしようと試みるあまり、音が歪んでしまったもののようです。

ビデオカメラで撮った映像の現地音のレベルは相当高いです。強力なAGC (Automatic Gain Control=自動利得調整)回路が組み込まれ、少しぐらい大きな音が入っても音がつぶれないようになっています。私の経験では、ベネチアのサン・マルコ寺院の鐘楼のてっぺんの鐘(直径1m以上もあったか?)の直下での撮影では、大音量のため、さすがにびびりが感じられましたが。

この高レベルの現地音に埋もれないようにしようとすると、ナレーションは相当高いレベルにしなければなりません、なぜか高いレベルにするのは困難です。それではビデオカメラでナレーションを採ってはどうか、というアイデアがありますが、ビデオカメラで採ったナレーションの音声はなぜか低音が弱くキンキンしていてあまり好ましくありません。これはテープを駆動したり、ズーム操作やピント合わせのためのモーター音を拾いにくくするためと思われる。

パソコンにおける音声処理はデジタル処理になります。テープレコーダなどのアナログ機器の信号はレベルを上げていくと入力と出力との相関関係が直線ではなく曲がって頭打ちになるところがあります。これを飽和点と言いますが、この点に近づいても音の劣化はそれほどひどくありませんが、デジタルの場合は、これ以上大きなレベルに出来ないという点を超えると、突然バリバリという、けたたましい音が発生します。デジタル音の記録や操作ではこのようなことが起こらないようにレベル設定を慎重にする必要があります。録音時にAGCやリミッターが利いた録音機器で録音すると、録音レベルの設定は楽になりますが、あまり利かせすぎると音質がおかしくなります。録音の時はあまり無理して飽和点を突破しないように録音しておいて、後から音声編集ソフトで様子を見ながらレベルを上げていくのも、身につけておきたい技術です。

そこで、このような努力でナレーションのレベルを極端に上げようとする前に、作品に入っているBGMや現地音のレベルを下げましょう。私はナレーションが入る作品では、それぞれの音の音量比は、耳で聞いてナレーションが10とすれば、BGMは8、現地音は5-6ぐらいにしたうえで、ナレーションのある部分は、BGM・現地音はさらに3-4ぐらいまで下げます。特に川や滝などの水音、車など町の騒音、祭り囃子、女性のおしゃべりなどは耳にきつい高音が多いので、下げてやる必要があります。鳥や虫の鳴き声とか、どうしても現地音を聞かせたいところにはナレーションを配置しないように考えます。